

トラフグはえ縄漁の漁模様と標識放流調査

漁業生産研究所 海洋資源グループ

1 2024年漁期トラフグはえ縄漁の結果

2024年漁期（10-2月）は1989年漁期以降最も少ない9日の出漁でしたが、漁獲量は56トンと2003年以降5番目に多い水揚げとなりました（図1）。また、1日1隻あたりの漁獲量も155kgと2003年漁期以降最も多くなりました。この好調の要因は、2023年生まれの1歳魚の資源が多かったことに加え、これまで愛知・三重・静岡の漁業者が連携して実施してきた小型魚再放流等の自主的な資源管理や種苗放流といった取組が資源の増加に寄与したと考えられます。

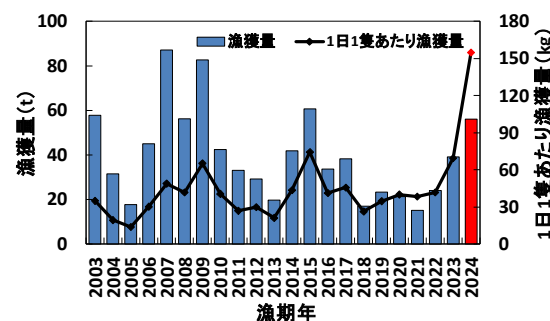


図1 トラフグはえ縄の漁獲量と1日1隻あたり漁獲量の推移

2 標識放流調査

伊勢・三河湾系群のトラフグは、伊勢・三河湾で成長した後、湾外の遠州灘へ出ていきますが、湾外での分布や移動は不明な点が多く、これらを解明することは、資源評価の精度向上や効果的な資源管理を検討するために重要です。そこで当グループでは愛知県ふぐ縄組合連合会と協力して、昨年から標識放流調査を実施しています。2024年2月10日に遠州灘の湾口部付近で標識をつけたトラフグを226個体放流し、どこで再捕されるか調査しました（図2、3）。その結果、2025年3月時点で7地点、12個体が再捕され、その場所は主に遠州灘周辺でしたが、和歌山県太地町沖での再捕もあり、一部は広域に回遊することが明らかになりました。今年も2月16日に119個体を標識放流しており、情報を蓄積することでトラフグの移動生態の解明に取り組んでいきます。



図2 放流した標識トラフグ



図3 トラフグの放流、再捕地点

水産試験場研究発表会を開催しました

本場 企画普及グループ

水産試験場では試験研究成果を発表する「水産試験場研究発表会」を毎年開催しています。令和6年度は2025年2月28日（金）に本場（蒲都市）で行われ、漁業関係者、水産関係事業者、県関係者など約70名が集まり、活発な意見交換が行われました。発表課題のうち、興味深かったもの2題を以下に紹介します。

1 碎石の粒度とアサリ潜砂 ～アサリが潜りやすい底質とは？～

（漁場改善グループ 和地技師）

低肥満度のアサリでも潜りやすく波浪等であさが掘り返されにくい漁場造成基質の選定を目的として、アサリの肥満度と基質粒度がアサリの潜砂行動に与える影響について試験しました。その結果、以下の3点が分かりました。①基質粒度が小さいほど潜砂率が高く、短時間で潜砂する。②粒度にバラツキのある基質は、粒度が小さい基質と同程度の潜砂率である（図4）③基質粒度が大きくなるほど、基質に潜るために高い肥満度が必要となる。

今後は、粒度にバラツキのある基質を用いて、これがアサリの生残率等にどのような影響を与えるのかフィールドで検証していきます。

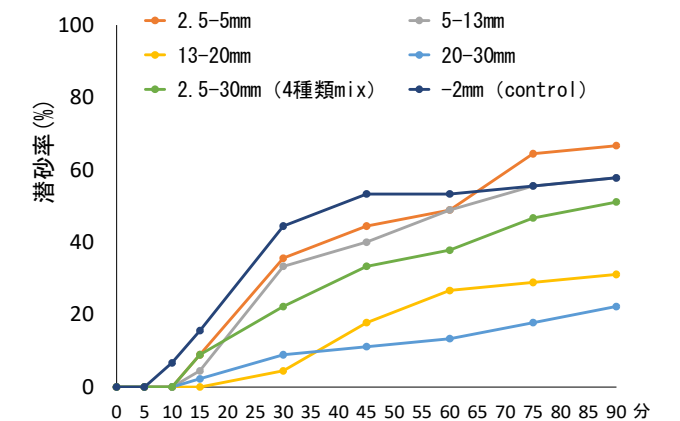


図4 各基質粒度における平均潜砂率

2 内水面の遊漁需要の多様化に対応した一方策 ～アマゴ遊漁の拡大～

（冷水魚養殖グループ 宮脇主任研究員）

河川漁場では遊漁需要の多様化が進んでおり、漁協からはアマゴの発眼卵放流や増殖管理に関する技術支援が求められています。そこで、水産試験場では、水温調査、発眼卵放流適地調査、河床調査、生息環境調査を行い、河川流域を発眼卵放流適地、親魚保護区域、生息好適地、遊漁区域に区域分け（マッピング）しました。そして、発眼卵の放流適地と評価した河川の上流域において2024年12月上旬に発眼卵を放流しました（図5）。

今後は生残や成長、釣果等を把握し、増殖効果を評価していきます。



図5 アマゴ発眼卵の放流試験

